



長く深い時間の射程で考えつづけた思想家の全貌と軌跡がここにある

吉本隆明全集

全38巻・別巻1



晶文社

父と全集

よしもとばなな

父にとつて考えることと仕事をすることは呼吸のようなものであり、日々の挑戦であり、唯一の憩いであった。

父は玄関先に急に読者さんがいらしても決して断ることなくお茶を出し、いつまでも話を聞いた。晩年足が痛くても、糖尿病で親指が氷みたい冷えていても、寒い玄関で立つてずっと話していた。

精神的に病んだ人がいれば「もし本気でずっとその人だけにかかりつきりになれたら、治るかもしれないんだけどねえ」と言った。幼い私が「どうしてそうしてあげられないの？」と聞いたら「なかなかそこまではできないもんだねえ」と答えた。

「お前とか娘とかの成功が憎い、未代までたたってやる」という人がいれば、「こんなことまで言う人がこの世にいるなんていやあ、驚いた」と本気でびっくりしていた。

散歩と買い物と夏に海に一週間行くことと二時間ドラマを観る以外には特に娯楽もなく、ほとんど旅行もせず、女遊びもしないし教授にもならないし、酒にもグルメにも興味がなかった父。

家からお金がなくなったときに出入りの人の名を出したら「人を疑うくらいならお金なんてなくなったほうがいい」ときっぱり言った父。

病院で高熱を出し死の床にいても「支払いのことで心配があつたら俺に言ってくれよ」と何回も言っていた父。自分の容態については一度も泣き言を言わず「お母ちゃんはどうした、お姉ちゃんは大丈夫か」と家族の心配ばかりしていた。

これほど人を救った人の望みが叶わないはずがないと心から信じていたが、この不況の時代に全集を出そうという出版社はなかった。

晩年、ほけて仕事が思うようにできなくなった父が、弱々しい笑顔で「間宮さん（この全集の目次を編んだ編集者さん）の目次はほんとうに考え抜かれていて感心したよ。出せたらほんとうに嬉しいけれど、今の時代はそんなに甘くないからねえ」と言った。

そんなことはない、必ず出る、今じゃないかもしれないけれど、必ず残るよ、と姉と私と間宮さんはくり返し父に言い続けた。父は淋しそうに「むつかしいと思うねえ」と言い続けるばかりだった。

お父さん、社長の太田さんや晶文社のみなさんや間宮さんが、死にものぐるいで作ってくれているよ、やっぱり出るよ。いつか私が死んだら、真っ先にそれを父に言いに行こう。いや、必ずもう届いているはずだ。

よしもとばなな



1

一九四一—一九四八
 「哲」の歌 孔丘と老聃 呼子と北風 詩碑を訪れて 山の挿話 詩集『草莽』 哀しき人々 雲と花との告別 宮沢賢治論ノート 「時禱」詩篇 伊勢物語論Ⅰ 伊勢物語論Ⅱ 歎異鈔に就いて 姉の死など 他

*戦前の府立化工時代と米沢工業学校時代、および敗戦直後の詩と散文を収める

2

一九四八—一九五〇
 詩稿Ⅹ 青い並木の列にそひて 緑の聖餐 エリアンの手記と詩 詩と科学との問題 ラムボオ若くはカール・マルクスの方法に就ての諸註 覚書Ⅰ 箴言Ⅰ 箴言Ⅱ 日時計篇(上) 他
 *初期発表詩篇および二冊の詩集刊行までの膨大な草稿詩篇と最初期の評論を収める

3

一九五一—一九五二
 日時計篇(下) 〈手形〉 他
 *膨大な草稿詩篇の後半部を収める

4

一九五二—一九五七
 固有時との対話 転位のための十篇 ぼくが罪を忘れないうちに 涙が涸れる 少年期 異数の世界へおひてゆく 少女 明日になったら 恋唄 マチウ書試論 蕪村詩のイデオロギイ 前世代の詩人たち 文学者の戦争責任 鮎川信夫論 定型と非定型 番犬の尻尾 西行小論 短歌命数論 日本近代詩の源流 他
 *周到に用意された二冊の詩集「固有時との対話」「転位のための十篇」とそれに続く詩篇、および初期の代表的評論「マチウ書試論」などを収める〔単行本未収録四篇〕

5

一九五七—一九五九
 高村光太郎 「戦旗」派の理論的動向 文学の上部構造化 宗祇論 「四季」派の本質 芸術的抵抗と挫折 芥川龍之介の死 転向論 死の国の世代へ 不許芸人入山門 「乞食論語」執筆をお奨めする アクシスの問題 近代批評の展開 橋川文三への返信 詩人の戦争責任論 海老すきと小魚すき 転向ファシストの詭弁 他
 *最初の単行本である作家論「高村光太郎」と、前巻に続く初期の代表的評論「芸術的抵抗と挫折」「転向論」、および花田・吉本論争の諸篇を収める〔単行本未収録一篇〕

略年譜

▼吉本隆明の源流をたどると、吉本家は熊本県天草郡御領村(現・天草市五和町)の出。隆明の祖父・権次が近くの志岐村に出て造船業を起し、百トン級の船の造船所として成功。海運業も営み一時は志岐村の長者番付の四位になるが、明治末の地域の造船業界の変化と大正期の不況で行き詰まる。父・順太郎が新規に製材業を試みるも及ばず、持ち家が差し押さえられたことをきっかけに一九二四(大正十三年)春、天草を出奔し吉京する。吉本一家が移り住んだ月島は東京湾内の埋め立ての島。工業地帯で造船所や関連の工場もあった。折から東京は震災後の帝都復興事業で大工・船大工の腕を持つ父・順太郎が再起を期すのに適していた。

●一九二四(大正十三年)

十一月二十五日 隆明、吉本順太郎・エミ夫妻の三男として、東京市京橋区月島東伸通四丁目一番地(現・東京都中央区月島四丁目三番)に生まれる。家には祖父・権次と祖母・マサ、長兄・勇、次兄・権平、姉・政枝が住む。

●一九二八(昭和三年) 四歳

遅くともこの年までに隣の島、新佃島西町二丁目に越す。棟割三軒長屋の角。

四月 弟・富士雄、同地で生まれる。

この頃(推定)までに父・順太郎、月島に釣り船・ボートなどを作る「吉本造船所」を起す。傍ら遊興用の貸しボート屋を始める。

●一九三二(昭和6年) 七歳

二月 妹・紀子生まれる。

四月 隆明、佃島尋常小学校に入學。

●一九三四(昭和9年) 十歳

この年、深川区(現・江東区) 門前仲町の今氏乙治の学習塾に入る。進学のためだったが合格後も通い、この塾で文学に目を開く。

●一九三七(昭和12年) 十三歳

四月 東京府立化学工業学校応用化学科に入學する。

この年(推定)、一家は同じ新佃島の西町二丁

6

一九五九—一九六一
 時のなかの死 もっと深く絶望せよ 工作者と殺人キッド 社会主義リアリズム論批判 文学的表現について 戦後世代の政治思想 日本ファシストの原像 シバルタイとは何か ある履歴 擬制の終焉 去年の死 睡眠の季節 現代学生論 葬儀屋との訣別 詩とはなにか 混迷のなかの指標 想い出メモ 壇谷雄高論 萩原朔太郎 室生犀星 小林秀雄 西行論断片 他
 *六〇年安保を挟む「戦後世代の政治思想」「擬制の終焉」などの政治思想評論、作家論、エッセイ群と詩を収める「単行本未収録二篇」

7

一九六二—一九六四
 丸山真勇論 戦後文学の転換 反安保闘争の悪煽動について 「政治と文学」なんてものはない 非行としての戦争 模写と鏡 「政治文学」への挽歌 いま文学に何か必要かI 戦後思想の価値転換とは何か 性についての断章 日本のナショナリズム 過去についての自註 死者の埋められた砦 佃渡しで 〈われわれはいま——〉 他
 *重厚な評論「丸山真勇論」と「日本のナショナリズム」を中心とする論考と詩を収める「単行本未収録二篇」

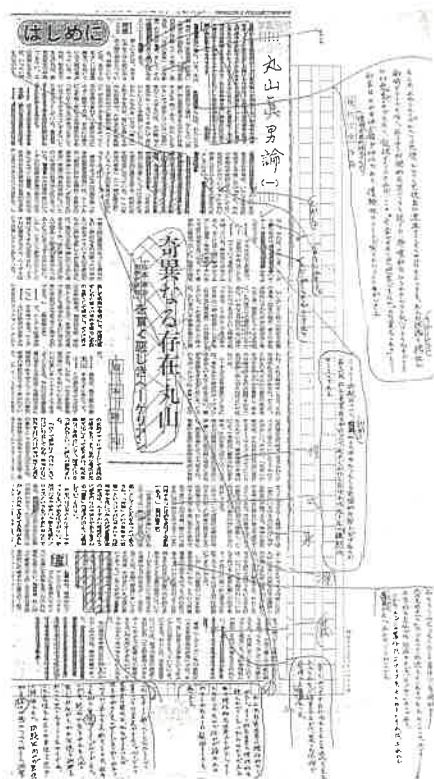
8

一九六一—一九六五
 言語にとって美とはなにか
 *党派的な文学論を一掃するために言語についての基礎的な考察から取り組まれた画期的な労作

9

一九六四—一九六八
 告知する歌 カール・マルクス
 自立の思想的拠点 思想的弁護論
 戦後思想の荒廃 佃んべえ 情況
 とはなにか ポンチ絵のなかの思想 なぜ書くか 沈黙の有意味性について 異常性をいかにとらえるか 新体詩まで 文芸的な、余りに文芸的な ある編集者の死 高村光太郎私誌 実践的矛盾について 他

*マルクスを救出するという緊張のもとに書かれた「カール・マルクス」、および「自立」を基礎づける諸論考などを収める「単行本未収録二篇」



◆新伯島の吉本一家。隆明、府立化学工業学校4年(左端)

- 目に越す。商店街の一角の棟割三軒長屋の真中で、両親は焼き芋屋と雑貨屋。
- 一九四一(昭和16)年 十七歳
- 十二月 東京府立化学工業学校を卒業。
- 同月 吉本家、住宅営団の土地付分譲住宅を十五年の月賦で購入する。翌年にかけて葛飾区上千葉四一八(現・お花茶屋二丁目)に移住。
- 一九四二(昭和17)年 十八歳
- 四月 米沢高等工業学校応用化学科に受験成績一番で入学。山形県米沢市の学生寮で暮らす。
- 一九四三(昭和18)年 十九歳
- 十二月 次兄・田尻権平陸軍中尉、飛行機の墜落事故で死去(行年二十四歳。没後大尉に特進)
- 権平は幼い頃、天草から共に上京した伯母夫婦の養子になっていた。
- 一九四四(昭和19)年 二十歳
- 九月 米沢工業専門学校(戦時下の改称)を繰り上げ卒業。
- 十月 東京工業大学電気化学科に入学。以降、翌春まで、学徒動員でミヨシ化学興業の研究室で働く。この間、山形県左沢に行き徴兵検査を受ける(甲種合格)。
- 一九四五(昭和20)年 二十一歳
- 三月 東京大空襲で恩師の今氏宅を喪う。
- 四月下旬頃 日本カーバイド工業魚津工場(富

一九六五—一九七一
共同幻想論 心的現象論序説 春秋社版『高村光太郎選集』解題
 *「言語」として美とはなにかから分岐派生した二つの原理的な考察『共同幻想論』『心的現象論序説』および選集の解題として書き継がれた光太郎論を収める

一九六六—一九七二
 島はみんな幻 〈不可解なもの〉のための非詩的なノート
 情況 行動の内部構造 天皇および天皇制について
 都市はなぜ都市であるか 新興宗教について 三番目の劇まで 南島論 暫定的メモ 『死霊』考 感性の自殺 岸上大作小論 思想の基準をめぐって 他
 * 大学紛争をひとつの背景とする『情況』、国家の思想としての天皇および天皇制論、そして重要な講演「南島論」などを収める「単行本未収録八篇」

一九七一—一九七四
 源実朝 ある抒情 〈農夫ミラーが云つた〉 帰つてこない夏
 〈関係〉として見える文学 「SECRET6」について 『林檎園日記』の頃など イギリス海岸の歌 わたしが料理を作ると き 藍蓼春き 恐怖と郷愁 聖と俗 ひとつの疾走 ロール シヤツハテスト 他
 * 和歌の作者であり制度の頭領でもあった実朝の実像に迫る『源実朝』と同時期の評論・エッセイ、および詩を収める「単行本未収録三篇」

一九七二—一九七六
 書物の解体学 島尾敏雄 〈何処へゆくのか〉 ある鎮魂 星の駅で 海は秋に うえの挿話 折口の詩 小学生の看護婦さん 『日本語はどういう言語か』について 感覚の構造 シヨウ リヨウバツタの音 〈死〉はなぜあるか 他
 * はじめて外国の文学者たちを論じた『書物の解体学』と長くその資質にひかれて論じてきた「島尾敏雄」、その他の散文と詩を収める「単行本未収録二篇」

改訂
 単行本未収録
 6行トリ
 2行日記
 2行日記

山恩へ同期二人と赴く。当時、同工場は有人ロケット戦闘機「秋水」の燃料製造を担っていた。燃料製造の開発に東京工業大学が関わっており、担当の教授もしばしば訪れた。隆明らは製造装置を作る段階から携わる。同社の寮で暮らす間、農村動員で埼玉県大里村で働き、また立山へ登山。
 五月頃 吉本家の女性(母・兄嫁・妹)、福島県稲田村(現・須賀川市)の養蚕農家に疎開。
 八月十五日 敗戦の放送を工場で聞き衝撃を受ける。程なく魚津を離れ、母らの疎開先と東京を行き来する。
 ●一九四七(昭和22)年 二十三歳
 九月 東京工業大学電気化学科を卒業。以後、幾つかの中小工場で働く。
 ●一九四八(昭和23)年 二十四歳
 一月 姉・政枝、結核のため厚生荘療養所(現・多摩市)で死去(行年二十五歳)。新個島の東京石川島造船所に勤務中に発病し療養生活に入る。八年余の療養中に短歌に親しむ。
 ●一九四九(昭和24)年 二十五歳
 四月 『特別研究生』の試験を受け、母校・東京工業大学に戻る。「特別研究生」は戦時中に兵役や徴用から研究者を守るために発足した制度。有給で二年間の研究生活を送る。
 ●一九五一(昭和26)年 二十七歳
 四月 東洋インキ製造株式会社に入社。化成部技術課に配属。同社青戸工場に通つ。
 ●一九五二(昭和27)年 二十八歳
 八月 父・順太郎に資金を借り、詩集「固有時」との対話。自費出版。
 ●一九五三(昭和28)年 二十九歳
 四月 東洋インキ労働組合連合会会長および青東洋インキ時代のポートレート



(撮影・鈴木雄一郎)

14

一九七四—一九七七
初期歌謡論 ある枕詞の話 他

*和歌形式の詩を發生の起源から形式の成立まで統一的に論じる古典批評の書を収める

15

一九七四—一九七八

最後の親鸞 論註と喩 詩人論 幻と鳥 雲へ約束した 夢の手 俗母子像 最後の場所 竹
内好の死 法の初源・言葉の初源 戦争の夏の日 慈円について 近親婚はどうして禁忌か
宇宙フィクションについて 『死の棘』の場合 他

*古典思想家論の集大成をなす『最後の親鸞』とその後の宗教論の基礎となった『論註と喩』などの評論・エッセイ、および『野性時代』連作の開始期の詩篇を収める『単行本未収録六篇』

16

一九七七—一九七九

戦後詩史論 吉本隆明歳時記 これに似た日 抽象的な街で 樗の説話 風の村 狂人 都市
に関するノート 山下菊二 本を読まなかつた 別れ 『記』『紀』歌謡と『おもしろ』歌謡 遠山啓
さんのこと 老い 他

*『修辭的な現在』に構成された『戦後詩史論』と愛好した詩人の詩から季節を読み取る『吉本隆明歳時記』などを収める『単行本未収録二篇』

17

一九七六—一九八〇

悲劇の解説 世界認識の方法 古くからの旅籠 海に流した自伝 木の根に帰る司祭 ある斬
壕 幻想論の根柢 〈反逆〉は内向する ゲーテの色 福島泰樹論 中上健次論 死のサルトル
夢・その他 他

*批評の現在を告知する『批評について』を序にすえた作家論集『悲劇の解説』とミシェル・フーコーとの対談を核に編まれた『世界認識の方法』などを収める『単行本未収録四篇』

18

一九八〇—一九八二

空虚としての主題 源氏物語論 水の絵本 掌の旅 木の説話 葉の魚 アジア的ということ
『文学者』という画像 村上一郎論 川端要壽のこと 果樹園から林檎を盗む 他

*社会の転換期に生み出される現在の文学を論じたはじめての本格的な文芸時評
『空虚としての主題』と『源氏物語論』、長く継続的にその主題を追って
書き継がれた『アジア的ということ』などを収める『単行本未収録八篇』

※新婚当時の隆明と和子。田端のアパート付近で



戸工場労働組合組合長となる。
十一月 賃金向上と越年賃金の闘争を指導。
青戸工場を拠点に闘うが敗退。隆明ら執行部総
辞任。

●一九五四(昭和29)年 三十歳

一月 隆明ら闘争の中心になった組合員九名に
配転命令。隆明は母校・東京工業大学へ長期出
張を命じられる。

十二月 上千葉の実家を出て文京区駒込坂下町
にアパートを借りる。四畳半一間。

●一九五五(昭和30)年 三十一歳

六月 本社総務部への転勤辞令を機に東洋イン
キ製造株式会社を退社する。

●一九五六(昭和31)年 三十二歳

七月頃より黒澤和子と同棲。
八月 長井・江崎特許事務所に入所。国際関係
の特許の翻訳・書類作成等に従事。

十月中に北区田端町三六五番地に越す。二階建
てアパートの六畳一間。

●一九五七(昭和32)年 三十三歳

五月 黒澤和子と入籍。

十二月 長女・多子誕生。

●一九五八(昭和33)年 三十四歳

十月 文京区駒込林町に越す。二階建ての四世
帯アパート。六畳一間。

●一九五九(昭和34)年 三十五歳

七月 台東区仲御徒町二丁目庭付一戸建ての
家に移る。義弟の同僚の持ち家を転勤のあいだ
借りたもの。

一九八二—一九八四
マス・イメージ論 ポーランドへの寄与 反核運動の思想
批判 「反核」問題をめぐって 反核運動の思想批判番外

字画の挿話 地名がくずれ墮ちる 祖母の字 親鸞における
言葉 『赤光』論 古井由吉について わがファウスト 幼児
性の勝利 自己慰安から渴望へ 小林秀雄について 《遠野物

語》別考 川崎徹小論 ふたつのボルノ映画まで 他

*さまざまな作品を個々の作者ではなく「現在」という作者が生み出した
ものとして論じる『マス・イメージ論』と時期を接して生じた世界的な
「反核」の動きを批判した「反核運動の思想批判」などを収める「単行本未収
録六篇」

一九八三—一九八七

声の葉 活字都市 大衆文化現考 n個の性をもった女性へ 映像から意味が解体するとき

元祖モラトリアム人間 政治なんでもはない 重層的な非決定へ 触れられた死 佃ことば
の喧嘩は職業になりうるか 現代電波絡繰試論 たった一つの黄金風景 こだわり住んだ町

『アンチ・オイディプス』論 放射能とわたし ミシエル・フーコーの死 他

*壇谷雄高との論争「重層的な非決定へ」と『死の位相学』の序に代えて書き下ろされた「触れられた死」などの
評論・エッセイと連作詩の最後の時期を収める「単行本未収録三十二篇」

一九八四—一九八七

記号の森の伝説歌 柳田国男論 西行論 良寛論 室内楽 なぜタクシーに乗るのだろう 石

川九楊論 エイズの伝播 「ゆきゆきて、神軍」その他 共同体の起源についての註 心と身体
の物語 米沢の生活 わたしの地名挿話 他

*「野性時代」の連作詩を組み替えてなった長編詩「記号の森の伝説歌」、柳田の新しい像を作り上げようと試み
た「柳田国男論」、そして長い年月をかけてまとめられた西行と良寛についての二つの長編評論などを収める
「単行本未収録八篇」

一九八五—一九八九

ハイ・イメージ論I 言葉からの触手 他

*「未知の現在」に「世界視線」という概念によって迫ろうとする『ハイ・イメージ論』の「I」、散文詩とも批評的
箴言ともみなしうる言語をめぐる思考の記述「言葉からの触手」などを収める「単行本未収録一篇」

●一九六〇(昭和35)年 三十六歳
六月 六〇年安保闘争の六、二五国会抗議行動
で逮捕、二晩留置される。

●一九六二(昭和37)年 三十七歳
『試行創刊(発行日・九月二十日)。「言語にとっ
て美とはなにか」の連載開始。

●一九六三(昭和38)年 三十九歳
六月中に台東区谷中初音町四丁目に越す。木造
二階建ての二階部分を借りる。

十一月 熊本・福岡での講演の合間に、初めて
父母の郷里・天草を訪れる。母の実家を訪ね、
父の従兄弟に会う。

●一九六四(昭和39)年 四十歳
七月 次女・真季子誕生。

●一九六五(昭和40)年 四十一歳
六、七月 北区田端町三二七番地に転居。建て
増しをした大家の旧宅部分を借りる。風呂付き
の平屋。

十一月 お花茶屋で食料品店を営んでいた長
兄・勇、喉頭癌のため死去(行年四十八歳)。

●一九六六(昭和41)年 四十二歳
二月 編集者・岩淵五郎(春秋社編集長)を全
日空機羽田沖墜落事故で喪う(行年三十八歳)。
岩淵は隆明の「模写と鏡」などを手がけ「試行」
の校正を手伝う。今氏乙治、父・順太郎と共に
「大衆の原像」として敬愛していた人物。

●一九六七(昭和42)年 四十三歳
六月 文京区千駄木一丁目に建売住宅を割賦で
購入。六軒の借間、借家を経て、初めての持ち
家。借地権で家屋のみ。

●一九六八(昭和43)年 四十四歳
四月 父・順太郎死去(行年七十五歳)。

十二月 「共同幻想論」(河出書房新社)刊。

●一九六九(昭和44)年 四十五歳
十月 十三年間勤めた特許事務所を退職。

●一九七一(昭和46)年 四十七歳
七月 母・エミ死去(行年七十八歳)。弟・富
士雄の妻・美恵子によれば、隆明は毎月、両親
の暮らす富士雄宅を訪れて小遣いを手渡すのを
常としていたという。

23

一九八七—一九八九
ハイ・イメージ論Ⅱ 宮沢賢治

*「未知の現在」を追いつめることと追いつめられることのせめぎ合いが急迫する『ハイ・イメージ論』の「Ⅱ」、この論考と平行するように書き下ろされた詩人論「宮沢賢治」を収める

24

一九八七—一九九〇
ハイ・イメージ論Ⅲ 情況としての画像 七〇年代のアメリカまで 生きていた西行 島尾敏雄の世界 異境歌小論 いそいで岡本かの子 東京についてのノート 南島論1 南島論2 三浦つとむ 他

*「共同幻想論」の「現在」版とも規定された『ハイ・イメージ論』の「Ⅲ」、唯一のテレビ時評「情況としての画像」などを収める「単行本未収録十九篇」

25

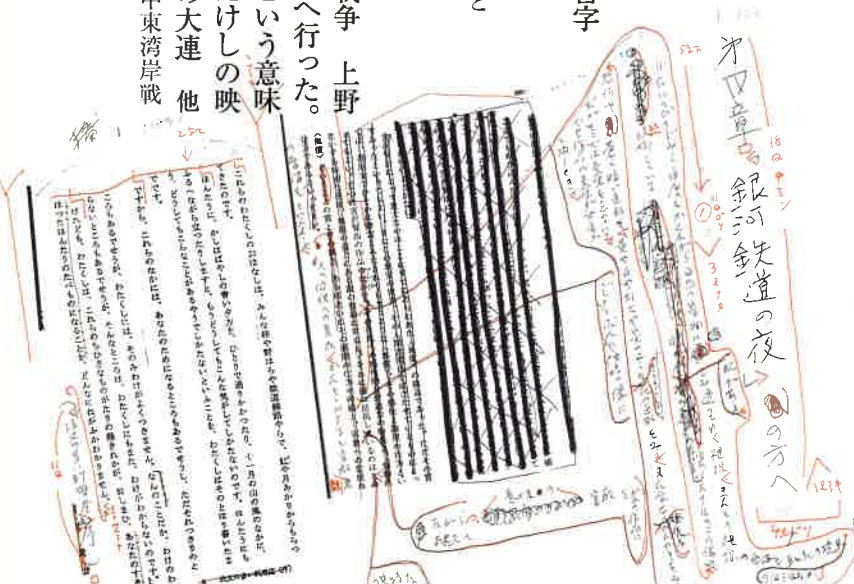
一九八七—一九九一
甦えるヴェイユ 一眼レフのカメラ 写真修行
小栗康平監督『死の棘』 月島の思い出 動機なき親殺し 世界転向論 病院のこと 戦争放棄の「憲法第九条」 三島由紀夫「檄」のあとさき 良寛書字
「二十世紀末の日本文化を考える」 他

*初期ヴェイユの考えにそっとじぶんの考えをブレンドし、いたましいヴェイユの貌を描き出した『甦えるヴェイユ』などを収める「単行本未収録八篇」

26

一九九一—一九九三
母型論 中東湾岸戦争私論 「芸」としてみた中東戦争 上野公園の冬 こんどソ連で起こったこと 「笑」はどこへ行つた。隅田川昨今 背景の記憶 わが読書 中島みゆきという意味 ラファディオ・ハーンとマルチニーク島 ビートたけしの映像 おもろそうし 三木成夫について 清岡卓行の大連 他

*「ハイ・イメージ論」の統編「Ⅳ」ともいふべき「母型論」と中東湾岸戦争についての発言などを収める「単行本未収録二十篇」



◆千駄木一丁目の家の書斎で、うたたねをする

- 一九七五(昭和50)年 五十一歳
- 十月 文京区千駄木三丁目(閑静な場所に宅地約二百十坪)を購入。家を建てる予定だったが実現しないまま後に手放す。
- 一九七六(昭和51)年 五十二歳
- 一九八〇(昭和55)年 五十六歳
- 三月 文京区本駒込三丁目の現在の住居を割賦で購入。借地権で家屋のみの所有。
- 六月 佐賀市での講演の後、天草を再訪する。のちに詩集「記号の森の伝説歌」(角川書店)となる、連作詩の取材の旅。
- 八月 長女・多子、「ラストセイリング」で第3回「ララ新人まんが賞」に進入選し(入選なし)、デビュー。筆名・ハルノ首子。
- 一九八四(昭和59)年 六十歳
- 七月 「マス・イメージ論」(福武書店)刊。
- 八月頃 雑誌「アンアン」(九月二十一日号)に「ファッションを奇麗な肖像写真の撮影で」"コムデギャルソンの服を着る。翌年、塩谷雄高と「コムデギャルソン論争」。
- 一九八七(昭和62)年 六十三歳
- 九月 イベント「いま、吉本隆明25時—24時間連続講演と討論」を中上健次、三上治と主催。東京・品川の倉庫で講演・対談・芝居・都はる

一九九二—一九九四

わたしの本はすぐに終る 現在はどこにあるか イザイホーの象徴について 卵をめぐる話
胎児という時期 隅田川有情 百人一首の遊び 私の実朝像 絶望的かつ楽天的な、日本の思
想書 作家・吉本ばななをめぐる二葉亭の文学 親鸞の十八願 他

*最後の詩「わたしの本はすぐに終る」、および「現在」という作家と日々生み出される作品の作者たちの関心の
ありかを結びつけて論じる「現在はどこにあるか」などを収める「単行本未収録十二篇」

一九九四—一九九七

わが転向 社会風景論 心に残る友 いずれ物書き自身を廃棄処分にする時代が来るだろう
はるかな米沢ロード 上野界隈の半世紀 サリン—オウム事件の残像 海辺のパチンコ 潮
体始末記 幸田文について 赤瀬川原平の路上観察学 谷川雁の死 埴谷雄高さんの死に際会
して 三木成夫「ヒトのからだ」に感動したこと 他

*雑誌編集部の挑発を受けて立って構成された「わが転向」、および水難事故の前後の文章を収める「単行本
未収録五十四篇」

一九九三—一九九七

超資本主義 思想の原像 僕ならこう考える

*先進諸国家が当面する現状を「超資本主義」の産業経済段階にあるとみなしオウム—サリン事件を扶む情況
を論じる『超資本主義』『思想の原像』、水難事故後はじめて語り下しの形で質問事項に答えて構成された『僕な
らこう考える』を収める

一九七〇—一九九七

心的現象論

*「試行」に終りまで連載された「目の知覚論」「身体論」「関係論」「了解論」の四部からなる長編評論「目の知覚
論」については著者の初出赤字入れ稿を底本とする

一九九八—一九九九

アフリカの段階について 遺書 父の像 少年 新年雑事 そば開眼 短歌の謎 不況とリス
トラの話 交友を断つ決定的なその日 たけしへの手紙 私の横光利一体験 江藤淳記 法
然と親鸞 他

*人類史の一番多様な可能性を持つ母型を掘り下げることが同時に歴史の未来にとって最大の射程をもつも
のとみなす「アフリカの段階について」、溺れかかったのだからという提案に応じて作られた『遺書』などを収め
る「単行本未収録十五篇」

みの歌唱指導等の24時間。

十月 次女・真秀子、「キッチン」で第六回「海
燕」新人文学賞を受賞しデビュー。筆名・吉
本ばなな（よしもとばなな）。

●一九八八（昭和63）年 六十四歳
十月 一級建築士の弟・富士雄、工事中の転落
事故がもとで死去（享年六十歳）。

●一九九二（平成4）年 六十八歳
十月 講演「わが月島」を行う。会場の「月島
社会教育会館」は隆明が生まれた住所のすぐ隣
り。月島地区の百年の歴史と未来を語る。

●一九九三（平成5）年 六十九歳
九月十月 東京・八重洲ブックセンターで「思
想詩人吉本隆明&吉本隆明写真展」開催。吉田
純撮影の写真の展示、本のフェア、サイン会他。

●一九九六（平成8）年 七十二歳
八月 家族と夏の休暇を過ごす西伊豆土肥海岸
で、遊泳中に溺れる。

この事故の後、持病の糖尿病の合併症による視
力・脚力の衰えが進む。以降、読み書きは虫眼
鏡、電子ルーペ、拡大器を用いるなど努力を要
し、著述は、口述やインタビュー後にゲラ刷り
を校正する方法が多くなる。脚力・体力の回復
のため自分流のリハビリに取り組む。

●一九九七（平成9）年 七十三歳
「試行」七四号を以て終刊（発行日：十二月
二〇日）。創刊以来、妻・和子が事務を担って
きた。

●一九九八（平成10）年 七十四歳
九月 和子、初めての句集「寒冷前線」（深夜
叢書社）を上梓。

●二〇〇三（平成15）年 七十九歳
二月 真秀子、男児を出産。

●二〇〇四（平成16）年 八十歳
二月 下血で日本医科大学付属病院に入院。虚
血性大腸炎と診断される。検査中に横行結腸に
癌が見つかり、翌月手術。

●二〇〇六（平成18）年 八十二歳
五月 「老いの超え方」（朝日新聞社）刊。

32

一九九〇—二〇〇一
句いを読む 写生の物語 食べものの話

*長い時間をかけて連載された三冊の本

一九九九—二〇〇一
詩人・評論家・作家のための言語論 僕なら言うぞ！ 老いの幸福論 今に生きる親鸞

*「語り」によって構成された四冊の本

34

一九九〇—二〇〇四

夏目漱石を読む 漱石の大きな旅 吉本隆明のメディアを疑え 本についての悪 島・列島・環南太平洋への考察 空閑地 徳大原富枝 「将たる器」の人 詩学叙説 本多秋五さんの死 川上春雄さんを悼む 永遠と現在 知っている限りで「SMAP」のこと 高橋源一郎について 他

*十二の作品を論じた『夏目漱石を読む』、英国留学と満韓の旅を論じた『漱石の大きな旅』、新聞雑誌の社会・政治時評を再構成した『吉本隆明のメディアを疑え』などを収める「単行本未収録三十七篇」

二〇〇四—二〇〇七

思想のアンソロジー 「ならずもの国家」異論 中学生のための社会科 家族のゆくえ 猫の肉 球に関する考察 詞人と詩人 言語論要綱 清岡卓行を悼む 他

*古代から現代までのさまざまな書きものから選ばれた言葉に批評をふした『思想のアンソロジー』、生涯のうちで一番多感な想像上の「中学生」に向けて書かれた「中学生のための社会科」などを収める「単行本未収録多数」

36

二〇〇七—二〇一

眞贋 日本語のゆくえ 開店休業 長老猫の黒ちゃんへ 大きい猫と小さい子供の話 小川国夫さんを悼む 「日常的探検・冒険」論 神話伝承と古謡 歌集『おほうなはら』について 鶉屋書店の想い出 親鸞の最終の言葉 他

*常識的な問いと答えを捨ててどうでもよさそうことから考えをはじめめる『眞贋』、言語について最後までその考えを推し進めようとした『日本語のゆくえ』、最後の連載となった食についてのエッセイ集『開店休業』などを収める「単行本未収録多数」

37 38

書簡Ⅰ 川上春雄宛全書簡
書簡Ⅱ

別巻

写真アルバム
生活史年譜(石関善治郎編)
著作年譜(宿沢あぐり編)

●二〇〇八(平成20)年 八十四歳

七月 昭和女子大学人見記念講堂で「芸術言語論」沈黙から芸術まで」を講演。車椅子で登壇し、聴衆二〇〇〇人に向け約三時間話す。(ほぼ日刊イトイ新聞10周年記念講演)。

●二〇〇九(平成21)年 八十五歳

一月 NHK、前年七月の講演を中心に構成したドキュメンタリー「吉本隆明 語る」沈黙から芸術まで」を放送。

九月 花巻市主催第19回「宮沢賢治賞」受賞。贈呈式に赴き受賞記念講演。

●二〇一〇(平成22)年

一月二十二日 発熱のため日本医科大学付属病院に緊急入院。以後同病院で加療。

三月十六日(十五日深夜) 肺炎により死去。行年八十七歳。十七日に通夜、十八日に葬儀が築地本願寺和田堀廟所で執り行われる。九月十五日同廟所の吉本家の墓に納骨。法名・釋光隆。

十月九日午後 妻・和子 自宅で老衰により死去。行年八十五歳。十一日に通夜、十二日に葬儀。十二月九日に納骨される。法名・釋清和。

(作成・石関善治郎)

*宮沢賢治賞受賞。花巻市で臨治を語る



戦後世代の政治思想

—— テントの中でも月見はできる

雨がふったらぬれればいいさ (雪山讃歌)

1

現在、わたしたちは、おおきく膨んだ国家独占社会で、くらげのように浮きつ沈みつしながら生きている。足はアスファルトや土をふみしめているが、思想はアトム化してめまぐるしい社会現象をおうため、人間はついに社会現象そのもののようにしか存在できない。この新しい社会体験はわたしたちの周囲が、戦前よりもはるかに膨大にふくれあがつて視えるところからきている。そこでは、鋭い社会的な不安定感が、形にそう影のように飽和感とむすびつついている。

しかし、あるものは、いや、戦前にくらべれば、十分に高度になった社会様式のなかで平和な日々を享受しているというかもしれない。これもまた、当然なことである。波立った海でも、水面下数十米ですでにおだやかな世界に到達できるのだ。わたしが危機とよぶとき、たれかが平和とよび、わたしが時代閉塞とよぶとき、たれかが希望のもてる未来とよぶとしても、異議をとねえることはできない。そこには、現実理解の共通点がないからである。わたしたちの政治思想や文学思想を、混乱と分裂におとし置いている原因はここにある。まず、わたしたちは、水面上にとびだして、現在、政治的に、思想的に、あるいは文学的に、生活的に直面しているあらゆる困難が、独占支配から派生したものであることを確認したうえで、おもむろに水面下の世界に下降してみなければならぬ。